日本の仏殿における建築空間の特性

浅野　清

【要約】日本の仏殿建築は最初その外から拝する方式に従って、外観をととのえるものとして、大陸から受容されたが、次第に礼拝者が内部に入りこむようになって、内部空間への関心を深めた。そしてやがて座居に適したコンパクトで落ちついた、独特な堂内を創りだしたのであったが、中世初頭に中国の新様式を受けいれたのを機縁に、その要求する空間に著しい変質をきたし、伝統的な空間と影響しあって活潑な変化をみせるに至った。こうした空間の捉え方を全く無関係に発展したヨーロッパの教会堂等に見られる空間への指向と各発展段階毎に比較することによって、我が国の建築に現れた民族文化の特性を考える一助としたい。

はしがき

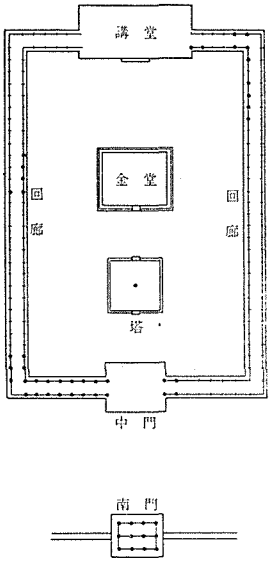
建築はその使用目的への適合とともに、形態の美しさが求められるものであることは容易に理解されるであろう。しかし建築は空間にその位置を占めるのであるから、周囲とのかかわり合いと、建築の内部のつくりだす空間を意識せずには存在し得ないといえる。したがって、その形態の美しさも、それとのかかわりあいの上に成り立つと見ることができる。本稿では仏殿の場合を例にとって、我が国におけるその空間の捉え方とその推移をたどることによって、我が国建築の特異性の理解につとめてみたいと思う。我が国の仏殿建築は幸いに七世紀以後の各時代にわたってその遺構を残しており、ほぼ一貫してそれを考察することができるのであるが、少くとも空間の捉え方については、中世末までにほとんどあらゆる可能な場合を一応試みつくしてきていると考えられるので、この目的のためには古代と中世のものを対象とすれば充分であると考える。

奈良時代以前

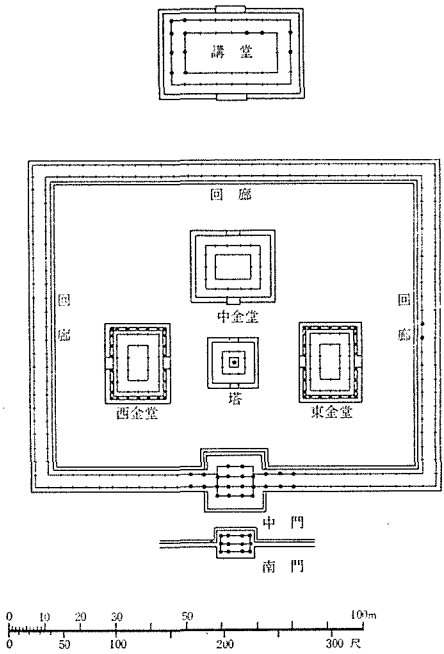
奈良時代までは仏殿の内部に仏像をまつり、これを堂の外から拝んでいた。もちろん堂内は仏の座にふさわしく荘麗につくられるのであるが、仏壇を広くとって、本尊の他に脇士や眷族が多数にならび、像も丈六像や等身大以上の巨大なものが多く、天井下いっぱいに仏像がおさまる例も少くないし、像が小さい場合でも、台座や天蓋などで堂内の空間をみたすのが普通であった。それでもなお七世紀の初めの頃と八世紀の終りとでは、その捉え方にかなりの相違ができてきていたのである。

幸いここ十数年程の間に飛鳥寺をはじめいくつかの上代寺院遺跡が発掘されたので、その数においては当時存在したものに対して、未だ九牛の一毛に近いかも知れないが、ある程度その推移を判断することができるようになった。飛鳥寺、四天王寺、川原寺、法隆寺などの例をとってみると（第1図—第4図）、その間にも整然とした左右対称を固執する前二者と、それを破った後二者のような相違が認められるが、いずれの場合もその仏殿（金堂）は廻廊で囲まれたコンパクトな一廓の内部に、塔婆のような異形な建物とならんで建っている。したがってそれは四方から眺められるとともに、塔の高さや中門と均合いを保ってつくられなければならず、そのため使用目的には無関係な上層を持っていた。そのよい実例は法隆寺金堂であるが、飛鳥寺の塔の後方正面に建つ金堂もその平面の形、大きさはこれに近いのである。

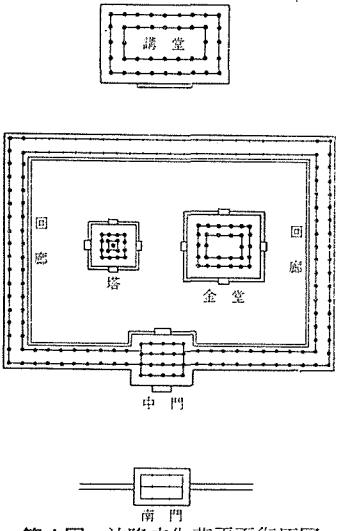
法隆寺の金堂では（第5、第6図）特に目にたつ上層の形の比例が程よく造られ、翼をひろげたように上下二層の軒を張り出し、入母屋屋根には強い矢だるみをつけて、鋭くとがる棟が高く立ちあがり、これに応じて妻飾の叉首にさえ強い反りがつけられている。この重層の重みを支えて強い胴張りを持った太い円柱が立ちならび、深い軒を受ける雲斗栱がその上からさし出されている（下層の軒下をめぐる連子窓をつらねた裳層のために、この強い表現は隠されている）。それに対し堂の内部には入側柱で囲まれる身舎（もや）いっぱいに仏壇を築いて多数の仏像を安置し、これに対する正面中央三間には扉が大きく開かれ、高く張りあげた天井からは荘麗な天蓋がおろされて、この空間をみたしている。これに



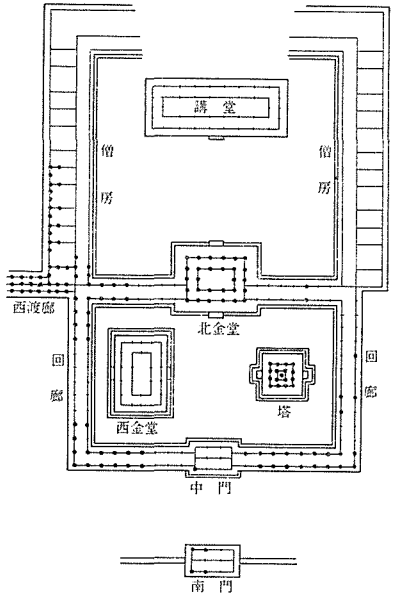
第2図　四天王寺伽藍平面復原図



第1図　飛鳥寺伽藍平面復原図



第4図　法隆寺伽藍平面復原図

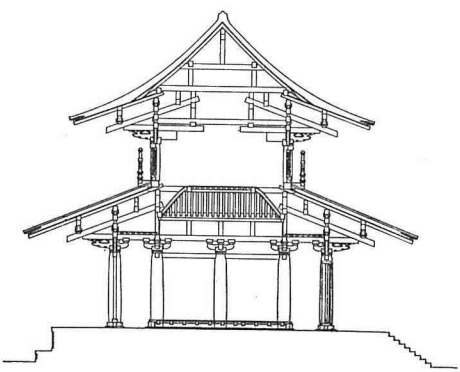


第3図　川原寺伽藍平面復原図

比べると周囲をとりまく庇の部分は幅も狭く、天井も低くて、身舎の余白のようにしか感じられない。もとよりその壁面にはくまなく壁画が描かれ、天井格間や支輪板も文様でみたされていた。しかしこの堂では常に外から拝まれていたことは、中世を通じて、別当の交替時に引継ぎをおこなう他、固く戸を閉して出入を禁じていたことからも知られよう。

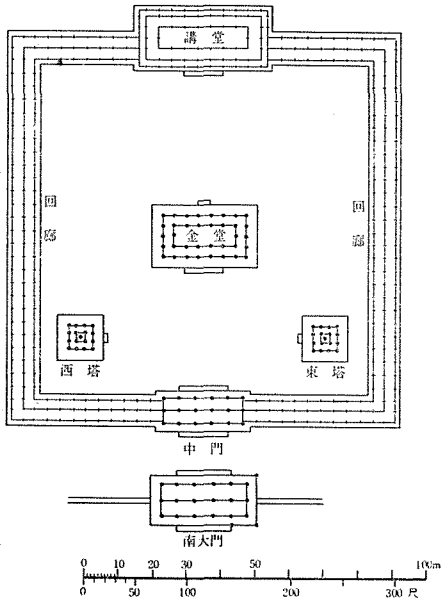
第5図　法隆寺金堂

薬師寺の場合はこれと平城京内の他の伽藍との過渡的なものであった（第7図）。やはり廻廊一廓の中に塔とともに置かれるのであるが、塔は左右前端の隅に相対して二基配され、金堂は正面性を確立したのである。しかしやはり塔とのバランスのために重層とされ、同様各層に裳層がつけられた。そして発掘遺跡から判断すると、中門は単層となり、南大門が重層にされたと推定される。薬師寺の建築の



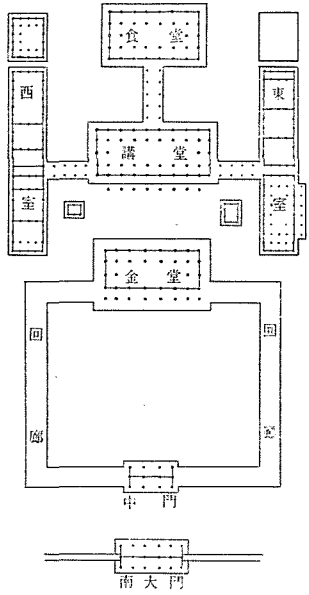
第6図　法隆寺金堂復原断面図

各層毎に裳層がついたのは著しい特色で、これがあの三重塔に特異なリズムを与え、荘重であった層塔に軽快さを見せ、荷重を支える太い柱の外を繊細に扱われた裳層でとり巻くことによって、優美な外観を獲得した。これと同様な意匠を持った重層の金堂を正面にし、三層塔を左右にしたこの空間は「龍宮造り」の名にふさわしい絶妙な雰囲気を作ったのであったが、金堂の前面にはかなり広い空間がつくられるので、法隆寺の場合と異なり、その前面の幅を拡げて、ファーサードを重親することになってきている。



第7図　薬師寺伽藍平面復原図

八世紀を代表するものとして唐招提寺金堂が残されているのは幸運である（**第8**、**第9図**）。この寺は第一級の官寺に比べれば小規模ではあるが、その構成において損色はない。ここでも今は廻廊が全く跡かたもなくなっているが、塔婆ははるか東方に遠ざけられ、廻廊は金堂の前庭のみを囲い、正面に単層の中門を開いていた。塔と離れて完全に独立した金堂は単層となり、正面七間の長いファーサードを広い前庭から眺められることになった。金堂の前面一間は吹きはなしにされているが、この両脇に廻廊がとりつくのであるから、この部分も廻廊の延長と見ることができる。



第8図　唐招提寺伽藍平面復原図

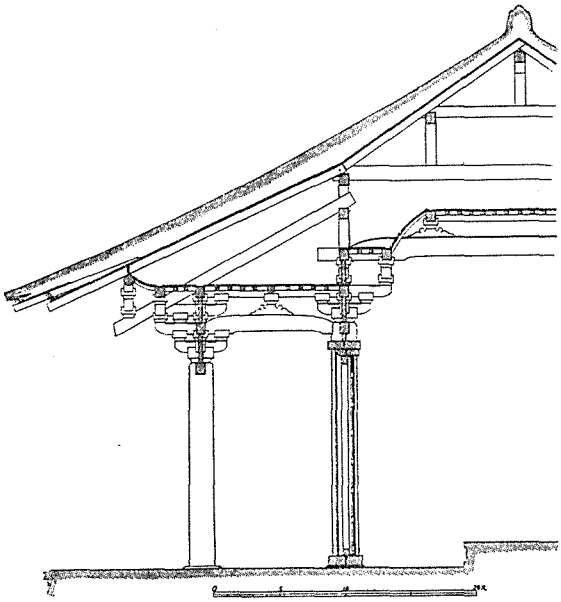
金堂の正面五間と背面中央一間の戸口を除く各間がことごとく連子窓とされているのも（これは中に扉がついて開閉でき、光線を調節できた）廻廊外側が連子窓の連続であったのと調和させるためであった。この金堂は近世の修理の際屋根を高められ、中世の修理で戸口や連子窓も改造されているため、かつてのすぐれた外観を少なからずそこねてはいるが、それでも大きい屋根をひろげた正面の雄姿はその特質をよく示している。柱の間隔も中央間十六尺、その脇の間十五尺、その次の間十三尺、端の間十一尺と漸減されて中心性をととのえ、四注の屋根の重みが隅に集まるかに見える力の動きにこたえている。柱の高さも中央間の幅十六尺にほぼ一致して、落付いた比例を見せ、柱上に積みあげられる三手先斗栱（ときょう）のつくりだす水平層は静かにゆとりを与え、重い屋根を支えて力の均衡をととのえ、棟でひきしめられた四注の屋根が心にくいまでの統一を与えている。

第9図　唐招提寺金堂

この前面一間は吹きはなしとなって外部の空間に属するため、正面五口の戸口を入るとただちに身舎（もや）に臨むのであるが（**第10図**）、この身舎の中央三間には戸口にせまる仏壇を築き、丈六の盧遮那仏、千手観音及び薬師像が、その光背を深く入りこむ梁上の天井いっぱいに立ちあがらせて安置されている。正面の扉は現在でも大きいのであるが、最初はさらに高く広く、柱間いっぱいに内方に向って開けられたのであるから、この開口を通して、内部の本尊は堂外

からまともに拝むことができたのである。もとより前面の広い空間も、法要の際などには活々とした動きをみせたのであった。この場こそ仏を拝する所であったのである。

このように外から像を拝むため、外観が重視される点では何よりもギリシャの神殿と共通するものが感じられる



第10図　唐招提寺金堂復原断面図

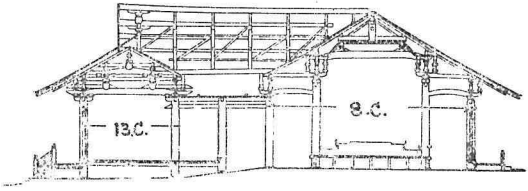
（**第11図**）。のみならず、梁と柱の荷重と支持との関係に建築的表現の重点がおかれていることも相通ずるのであるが、全体や各部分の比例均衡がととのい、節度のある格調を示す点でも一致を見出すのである。ただ重くて脆い積みあげ式の石造とねばりのある組み立て式の木造との相違ははっきり現われており、ギリシャのものの重厚さに比すれば著しく弾力性をもち、軽快である。しかし雨に備えて軒出の深い大きい屋根をあげている点で甚だしく異なった姿を造りだしている。

またギリシャの神殿は孤立して立つ場合が多く、整然と軸線をそろえて、他の建物と規則正しい関連において配される点は極東のものの際だった特色といえる。それにギリシャの神殿では奥行が深く、妻が常に正面であって、その姿がととのえられ、長い側面では透視的に見た効果がねらわれているのに対し、こちらのものは妻を側面にむけて、正面を広く見せ、前面に広い庭を要求すると共に、後方に建物を併列させ、更に両側からこれに対面した堂を配して、全体の体系をととのえることを考慮している。

しかし奈良時代の仏殿が常にこのような方式に従ったの

ではなく、すでにこの時代からその前面に接して礼堂をおくものが現れた。文献に出るものを別にしても、その実例が東大寺三月堂に見られる（第12図）。現在のその礼堂は鎌倉時代に再建されたもので、屋根も変更されて主堂の四注屋根とT字型にかみあい、堂の全面をおおっているが、最初は別棟の建物が前後にならび、軒と軒は相接して、その水を木製の樋でうけ、外は現在のように、一つの堂として囲われていた。この礼堂は鎌倉時代に新しく附加されたものではなく、その前から存在していたことは、文献の上だけでなく、実物についてもある程度たどることができる。このように前後に建物を接して配置した例は宇佐八幡宮本殿などにも見られるが、当時の建築構造では後述するように、礼堂と主堂を一つ屋根に納めて、前後に深い堂を作ることは未だ不可能であったのである。しかしいずれにしてもこのような堂は内部においても中間に一つのくびれができ、外観においても特に側面から眺めた姿が不自然であった。なお別棟の代りに主屋の軒を延して庇を広くし、そこを拝む場にするものも次の平安時代に入ると広く普及している。ちなみに三月堂では元は主堂にも床が張られ、周囲にやはり縁をめぐらしていたことが、柱に残された痕跡から知られるが、仏壇はその床上に、身舎の柱内いっぱいに低く作られ、壇上には巨大な像が多数安置されていたのである。

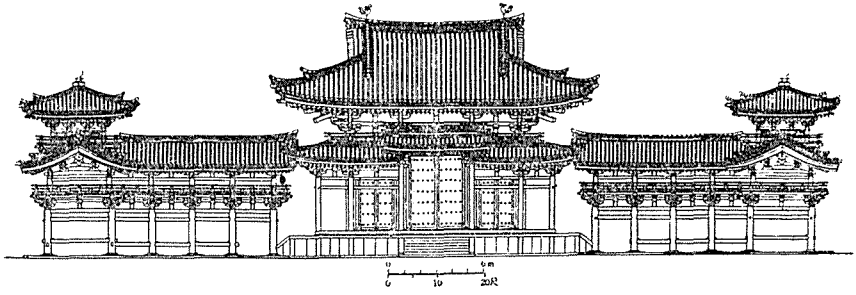
第11図　パスタム・ポセイドン神殿



第12図　東大寺三月堂断面図

平安時代

奈良時代にすでに礼堂という形で人間の座としての内部空間が要求されてきていたのであったが、平安時代に入るとこの傾向は急劇に促進され、特に山上寺院などでは廻廊や前庭を広くとることが不可能となって、人間の座が前庭から内部へ移ったことは想像できる。しかし外観を重視する在来の方式のものがなくなったのではなく、更に一層正面観の重視に傾いて行ったのであった。即ち平安時代に入ると、堂の前庭を囲っていた廻廊の前面の廊を除くことによって、あだかも劇の舞台を見るように、遠くから正堂とその両脇に展開する廻廊を眺められるようなものが現れてきたのであったが（法勝寺、毛越寺）、その更に極端な例が平等院鳳凰堂に見られる（第13図）。この阿弥陀堂は西方浄土の姿をほうふつさせようとする感覚的なねらいをもっていたが、廻廊も全体を幻想的に見せるように工夫され、下を吹きぬきにした重層の廻廊とした上、両端はわずか前方へ折れ曲げてとどめ、曲り角に小さい楼をあげて複雑な構成をもとめ、主堂のまわりをめぐる細い角柱に支えられた



第13図　平等院鳳凰堂正面図

裳層と相応じて、軽妙な外観を作り出した。弥陀像を安置する中堂の内部が扉絵の阿弥陀来迎図をはじめ、彩色文様と七宝の精緻さを駆使して、繊麗に荘厳されたことはいうまでもない。

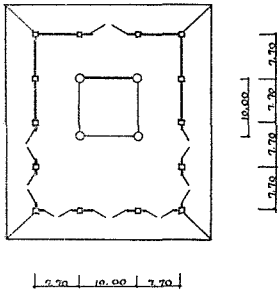
拝む人がたとえ僧侶でも、正式には堂外から拝するという原則を破った仏殿は天台宗の常行堂であった。ここでは仏像を中心に安置して、そのまわりをめぐり歩いて拝むのであるから、従来身舎の余白にすぎなかった庇が広くされてその場とされ、堂は四方対称の有心平面をとることになる。したがって屋根も頂が一点に

集中する宝形造りが愛好される。常行堂の古い例は残っていないが、これに類する例として、白水阿弥陀堂（福島）をあげよう（第14図）。これは中央の身舎が十三尺四方、周囲の庇の幅が九尺で、とち葺の宝形屋根をあげ、斗栱は出組である。正面三間、側面前端及び背面中央に扉を開く。身舎の後よりに仏壇をおき、この部分には折上小組格天井を張るが、周囲の庇では元は天井をはらず、化粧屋根裏を見せていた。したがって仏のための中央空間がコンパクトにまとまっているのに対し、周囲に高い空間を作って、堂内を広く見せていた。

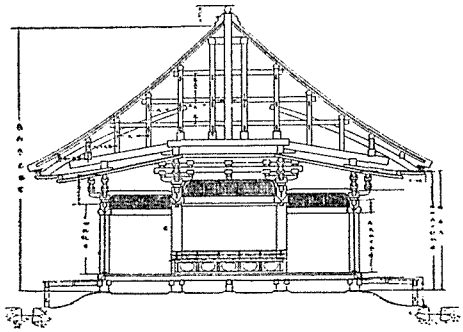
実年代は鎌倉時代に下ると思われる法界寺阿弥陀堂（京都）は更に大きい宝形造り檜皮葺、三斗組の簡素な堂で、身舎は十八尺四方、周囲の庇は十三尺幅である（第15図）。身舎内には折上げ組入天井を張って、仏壇上に丈六阿弥陀像を安置し、庇は化粧屋根裏で高く、外では周囲に裳層をめぐらせて、外形をととのえている。この裳層の正面を除く一部は参籠所のように用いられていたことがあるらしい痕跡をとどめる。このように大きい堂であるから、外は五間に分割され、したがって柱筋も身舎のものと揃わず、側柱と入側柱間につなぎ梁を渡していないので、堂内庇の部分は一層空ばくとして、静寂な雰囲気を作り出している。

この形式の堂は内部に人が入るのではあるが、一般信徒の参詣を予想せず、修道者のみのための空間を作ったものと考えられる。それ故に法界寺阿弥陀堂では裳層に室を囲って一般の参籠者の場としたようであり、鶴林寺（兵庫）太子堂や常行堂ではこのような堂の前面に庇を下したり、一間前方へ堂を延して礼堂にあてた。これらの場合には礼堂との境に格子が作られて境されたのであるが、同一の空間内に入れて、仏前を広くし、しかも宝形屋根にして、有心堂の感じを活かすように工夫されたのが富貴大堂（大分）である（第16、第17図）。このように堂の対称性を破ると、内部と屋根構造が剰離するのであるから、化粧屋根を廃して一面に平らな小組格天井を張ることによって、これを解決したのである。ここでは正面三間と側面前二間並びに背面中央一間を戸口としたが、こうして堂内は低い天井に閉されて、座居静止の姿勢にふさわしい落付いた空間をつくりだしたのである。

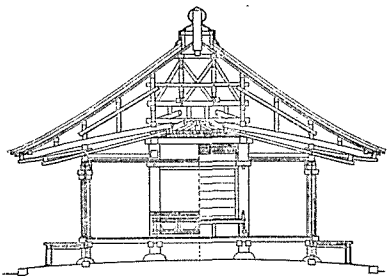
ここで思い合わされることはヨーロッパのキリスト教会



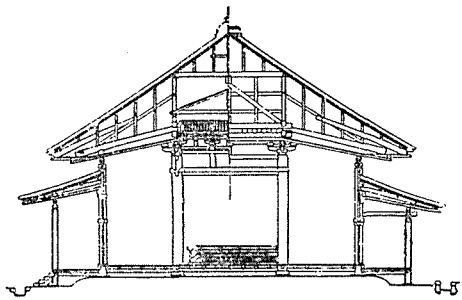
第16図　富貴大堂平面図



第14図　白水阿弥陀堂断面図



第17図　富貴大堂断面図



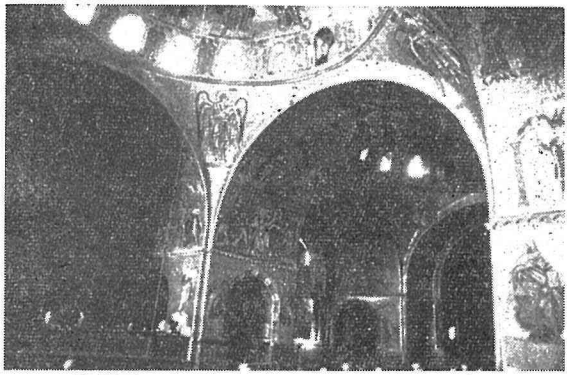
第15図　法界寺阿弥陀堂断面図

堂にも奥行の長い矩形平面のものと並んで八角或は方形の有心平面の伝統がかなり長く続いたことである（八角堂といえば奈良時代の遺例もあるが、それらは身舎が広く、仏壇が大きくとられていて、やはり外から拝む堂であった）。しかしヨーロッパの場合には祭壇が中心にこないで、一方の端に附加され、有心平面の頂点であるその中央が人間の座にされた点に問題が残り、この不自然さがこの平面計画を常に不安定なものにした。しかし両者の更に重大な相違はその内部空間であって、ヨーロッパの有心堂には巨大な円蓋（ドーム）をいただく空間を中心にして小宇宙を連想させる広大な空間を求めているのに対し（第18図）、我が国の有心堂では、時の進むにつれて、次第に切りつめたコンパクトな空間が求められて行ったことである。

我が国のこのような抑制された内部空間への心使いは一般の矩形平面の堂でも見られるのである。

法隆寺講堂は平安時代前期に創建されたものと考えられるが、延長三年に焼失して再建された頃には

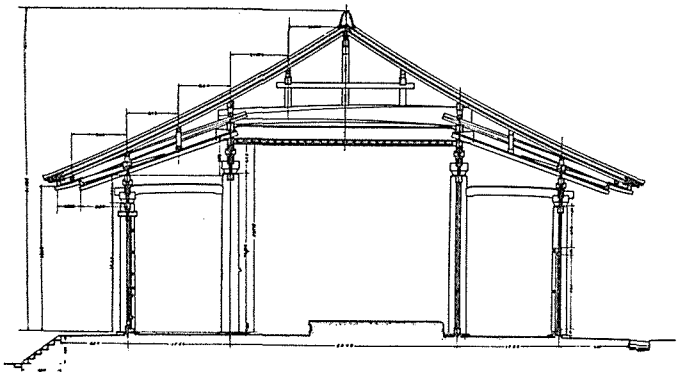
すでに本来の講堂としての機能を失い、一つの仏殿と化していたのである。再建に当っては同じ大きさの堂としながら、身舎を著しく縮少し（長さ幅とも一・五メートル以上）、それだけ庇を広くした。このことは庇に参拝者の入堂を許したことを示すと見られるが、平安時代に入ると、身舎に比して庇の広い仏堂が普通となり、室生寺金堂などもその



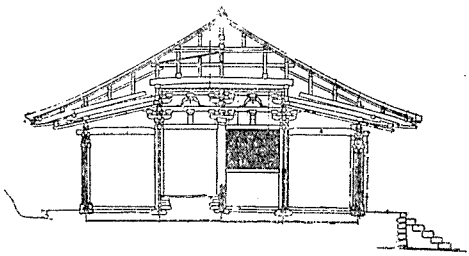
第18図　ベネチアのサン・マルコ大聖堂内部

例に入る。この堂の今の前面礼堂（孫庇）は江戸時代に造られたものであるが、鎌倉時代の古図にも礼堂を図したものがあるから、もっと古くからあったことがわかる。しかし当初から存在したかどうかはわからない。この堂では今身舎に組入天井を張っているが、元は天井がなくて、叉首組の屋根裏を下から見上げていたもので、叉首は反りを持ち、丁寧に仕上げられている。なおこの堂の棰の勾配はかなり強いので、あるいはこの棰の上に檜皮か柿の屋根を作ったものではなはったかと考えられる。そのようなことは奈良時代には普通のことであった。しかし法隆寺大講堂では庇で下から見えている棰は傾斜がゆるやかで、直接屋根瓦を支えるものではなく、別にその上に実際に瓦を支える棰（野棰）が組まれている（第19図）。その結果庇の棰の三角の深い入りこみが浅くなって、おだやかな空間をつくることになったのであるが、更にこの堂では今まで梁の上にあげられていた組入天井（唐招提寺、三月堂）を梁下に一面に張ったので、もはや下から太くて重い梁組と深い天井の入りこみを見ることなく、極めて穏やかな空間を創り出すことになったのである。

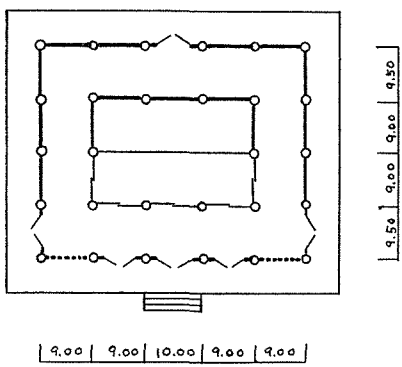
この屋根構造の長所を利用して、更に徹底した空間を作り出したのが醍醐寺薬師堂である（第20、第21図）。ここでは身舎の周囲をかこって庇と空間を分離し、特に前後の庇を左右の庇よりやや広くし、庇の化粧垂の傾斜は一層ゆるめられた。したがって外側柱の高さを低くすることができて、拝む空間がひきしまった。そのかわり、身舎では仏像を納めるために、逆に天井を高くする必要を生じ、斗栱を二段に重ねたのである。（上段の斗栱間中備には蟇股を入れて単調を破った。）ここでも組入天井は梁下に一面に張りわたされ、太い梁をかくしていることはいうまでもな



第19図　法隆寺大講堂断面図



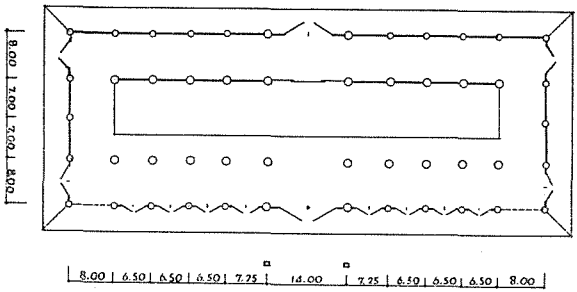
第21図　醍醐寺薬師堂断面図



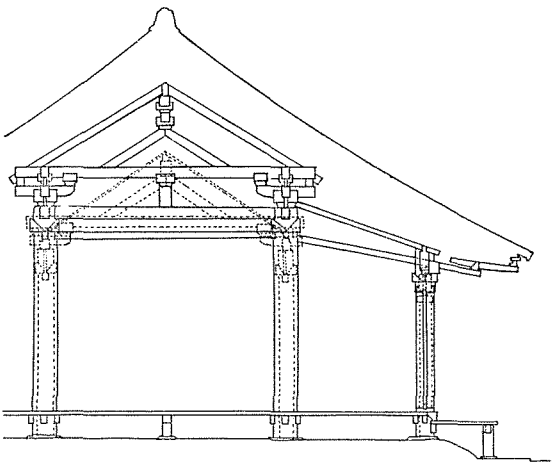
第20図　醍醐寺薬師堂平面図

い。

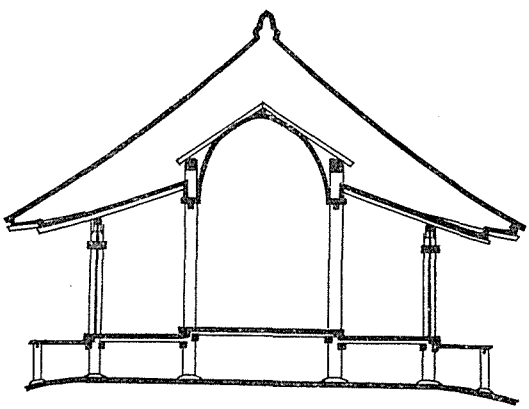
さらに巧妙な空間構成の例として浄瑠璃寺本堂（京都）をあげておこう（第22、第23図）。これは九体阿弥陀堂で、中央に一体の丈六弥陀、その左右に四体ずつの半丈六の弥陀、合わせて九体の弥陀像をまつっているので、柱間数は庇を含んで十一間に達するのであるが、中央一間では柱間隔をひろめ、柱を高く太くし、身舎の化粧屋根も庇の化粧屋根も一段と高くあげて丈六像に応じ、他の部分では柱間隔をせばめるとともに柱を極度に細くして、繊細な感じをつくりだしている。このように内部空間には高低があっても、屋根は一連の長いもので、元は入母屋造りとされ、おそらく檜皮葺であった。また庇は身舎に比して広く、低い



第22図　浄瑠璃寺本堂平面図



第23図　浄瑠璃寺本堂断面図

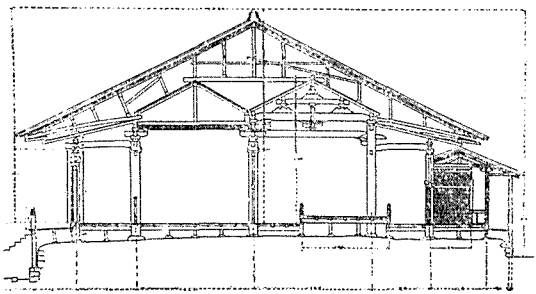


第24図　三千院本堂断面図

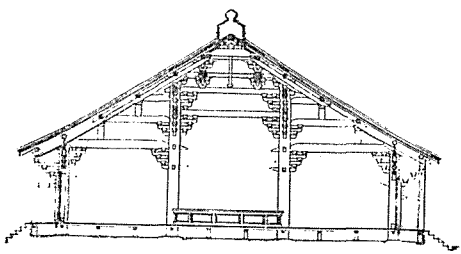
側柱の上にゆるい勾配の化粧棰をならべているので、ここでも坐居に適するひきしまった空間を形づくるのである。これに応じて仏壇も二十糎程度の高さにされ、仏像の大きさに応ずるよう、身舎の化粧屋根に強い傾斜を与えて、必要な空間を作っている。

こうしたコンパクトな空間は三千院本堂（京都）でも見られる（第24図）。この堂は妻入で、正面を三間、側面を四間にし、身舎を前後に細長くし、周囲の庇の化粧棰勾配を極度にゆるくして、低平な空間をつくり、台座の低い丈六弥陀を低い仏壇上に安置した身舎には、仏像の光背の形にそうように舟底型の板打天井を張りあげているのである（この板には彩画している）。これらの感触は極めてデリケートで、仏に近親感を抱かせる感覚的なものがある。

しかし更に画期的な発展は礼堂を一つ屋根にとりこんだ、奥行の深い大仏堂が成立したことである。これは東大寺三月堂の方式の完成とみることができる。これは化粧棰と野棰の分離が可能にしたもので、野屋根は化粧屋根の上にのせられたものとなり、その関係はヨーロッパの基督教会堂における石造の穹窿とその上にのる木造の置屋根との関係に通ずる。その最古の例は当麻寺曼荼羅堂であるが、ここでは四注の化粧屋根を持つ内陣（この部分平安前期のもの）と礼堂が前後に相接してならび、周囲を庇がとりまいているのである（第25図）。この簡明な組合わせは次の鎌倉時代に入ると千変万化して、無数の巧妙な組合わせを展開するのである。この種の堂はこのように内部における新しい発展を見せるのであるが、外観では、そのため極端に大き



第25図　当麻寺曼荼羅堂断面図



第26図　浄土寺浄土堂断面図

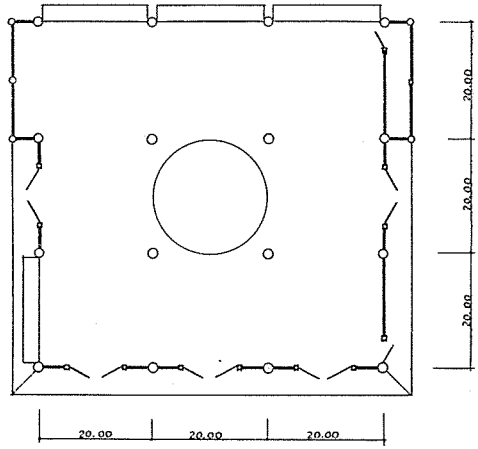
い屋根を持つこととなり、不自然な姿を見せるのである。

鎌倉時代

鎌倉時代に入っても前代に始まったすべての型の仏殿が継続して現れるのであるが、伝統的な矩形平面の堂は奈良、京都などの復古的建物に多く見られる。しかし仏殿の内部を有効に用いるため、身舎後列柱を後方へ少しおくり、仏壇の位置を後退させるよう工夫が加えられた。有心平面も特に小仏堂には数多く利用されたが、これも前時代にすでにあらゆる工夫は出つくしているとみてよい。

ただ身舎の隅に四本の柱を立てることをやめて、仏壇の後の柱二本を残し、前方を開放するものが多く現われ、天井も仏壇上を特に高めることをしないものも出てくる。しかし全く異質的なものとして、新たに中国にの様式をとり入れた浄土寺浄土堂（兵庫）とかなり多数の実例を残す禅宗仏殿をあげなければならない。

浄土寺浄土堂は六十尺四方の広い堂であるが、柱の配置は小規模な集中堂と同様三間四方という簡明なもので、各柱間隔は等しく二十尺ずつである（**第26、第27図**）。外から眺めた姿は建ちの低い宝形造りの堂であるが、このように低く見えるのは、在来の我が国の伝統的な建築と違って、斗栱を柱上に積みあげないで、肘木を柱に挿しこみ、これを組み下がって、前方に持ち出す構造であるのと、棰が直接屋根瓦をうける方式であるため、かなり深い軒出を持つこの建物では軒先がずっと下ってくるためである。それに屋根面も軒先も直線でできていて、異様であるが、堂内はこれに反して、急傾斜の棰が上って行くので、中心部では



第27図　浄土寺浄土堂平面図

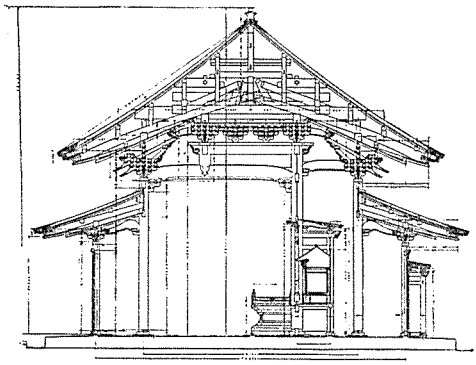
非常に高くなる。そのうえ身舎は二十尺四方にすぎないので、庇と身舎の境では桙がずっと上って、身舎の柱は際だって高くなる。またここでも斗栱は柱上に積みあげられないで、柱に肘木をさして組み下がるのであるから、柱はほとんど屋根面直下までのび上る。しかし柱の上部は柱間をつなぐ貫や斗栱を組んで固められ、さらに各側柱上から身舎の柱の横腹へ長い梁がかけられ、この上に二重三重の梁が組み上げられて、屋根を支えるのであるから、まことに騒々しい限りで、法界寺阿弥陀堂で見たような、からりとした空間とは対照的である。その身舎は狭く高い空間で、上方は籠のように貫や斗栱で囲われているのであるが、ここには身合いっぱいに円形仏壇をすえ、その上に弥陀三尊の高く立ち上る立像を安置している。こうして身舎は仏像を入れる厨子のようになるのであるが、広い面積を占める周囲の庇は上方に累々と梁が組みわたされているのであるから、声を限りに唱える熱狂的な念仏修行にふさわしい光景である。このように混沌とした濃厚な意匠は今までの平坦な天井を低く張って、コンパクトな空間へ切りつめて行った消極的な日本人の好みではとうてい着想できなかったものであった。

なおこの堂では正面三口と側面中央間を戸口とする他、背面と一方の側面前端に蔀戸（しとみど）をつり、応く解放できるようになっていることも注意を要し、身舎をかこむ四本の柱の外の広大な空間が、多数の人々の入堂を許すのみでなく、この蔀戸や扉を開放した時、堂外の大衆も念仏に参加できる計画であったことを知り得るのである。

この荒けずりで異様な天竺様は彗星の如く現れて、たちまち跡を断ってしまったが、これに反して、禅宗仏殿ははるかに持続的で、より完成された形態を具え、さらに一層伝統的な建築とかけ離れたものであった。それは残念ながら初期の仏殿を残しておらず、鎌倉時代後期以後のものを知り得るのみであるが、それらは形式の統一されたもので、時代による変化も少なく、かなり保守的にその形式を墨守したことを知りうる。

この禅宗仏殿は正方形の平面を持ち、周囲に裳層をめぐらしたものとそうでないものと二種あるが、その主屋の取扱い方は同一で、裳層のないものも柱は高い（第28図）。これらの堂の柱は目立って細長く、柱間隔は広いのである

が、このような構造は柱間に貫を幾通りも貫通し、楔じめしてこれを固めることによって成立した。次に身合柱を四本たてるべきところ、前方の二本を除き、その代りに後方の二本の柱から前方の外側柱上へ向って巨大な梁をかけ、この梁上に柱に代る束をのせて荷を支え、広々とした空間を獲得したのである。こうして高く広い空間を求めたのであるが、斗栱は伝統的なもの（和様）が梁や桁の太さとかけ離れない、太い木割であったのと異なり、著しく小柄なものを用いた。即ち和様の場合には斗栱と虹梁を組み合わせうる程の太い斗栱を用いたが、こちらでは梁が巨大化したのに反比例して斗栱が微小化したため、斗栱は常にグループとしてこれに対応することとなった。したがって比較的細い柱は上方で更に急に細められ、その上に台輪とよぶ盤をのせ、盤上に複雑に組合った一群の斗栱がのせられた。しかしそれでは柱上斗栱と柱上斗栱の間がひどく離れることとなるので、その中間にも幾組かの斗栱をならべて、すきまをびっしり詰めた。こうして斗栱の装飾的効果が目立つこととなったのであるが、さらに斗組の中に組みこまれた尾垂の尻が内方に延びて、にぎやかな組合わせを見せるのに対し、身舎の上には鏡天井とよぶ平な板天井を張って、休息を与えている。床は正式には土間となり、立礼に応じて仏壇も高められ、上下に繰型を重ねて、にぎやかに飾られた。こうした装飾的な意図は他の細部にもいきわたり、木鼻、海老虹梁、柱下の礎盤、扉をつる藁座、桟唐戸、花頭窓、波形連子などにまで、異様な曲線がはんらんした。

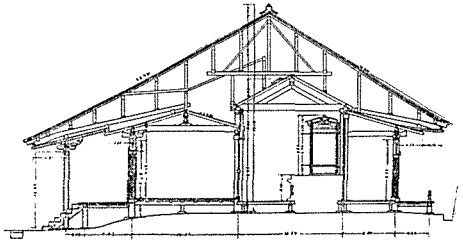


第28図　裳層付禅宗仏殿断面図

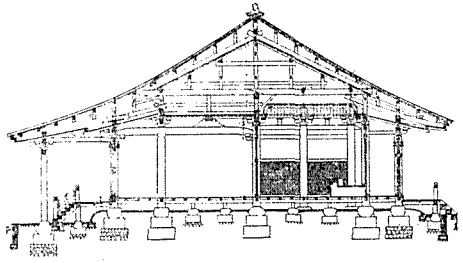
これらの新様式は伝統様式に強い刺戟を与えるのであるが、この珍奇な姿は余りにも異質的であったため、一挙に

その全面的な模倣が始まるようなことはなく、先ず構造的な長所をとり入れ、徐々に装飾の細部を多少変形しながら、臆病に採用していったのである。

この時代に伝統様式に属するもので、最も活潑に新意匠を展開していったのは、平面構成の複雑な礼堂つきの仏堂であった。さきに平安時代末に完成した当麻寺曼荼羅堂では礼堂と内陣を中心にして、まわりを庇で囲う方式であったので、戸口を入った部分の庇が無駄な空間となる。それでそこの入側柱を除き、大梁をかけ、その上に柱に代る束をのせて荷重を支え、戸口を入るとただちに内陣の前に広い礼堂を造る工夫をした。それには長寿寺本堂のように、ここに屋根形の化粧天井を張ったものもあったが（**第29図**）、庇に当る部分を片流れの化粧屋根とし、身舎に入る部分を水平な天井としたものがより普及された（**第33図**）。しかし長弓寺本堂（奈良）のように前後二間の礼堂の前端一間を化粧屋根とし、後方二間を水平天井として、三間を通した大梁をかけた上、庇と身舎の境にこの大梁を受ける柱を立てた大胆なものも現れた（**第30図**）。これは当麻寺曼荼羅堂への逆戻りではなくて、こうすることによって、庇と身舎の境を意識させない広大な空間を獲得しているのである。



第29図　長寿寺本堂断面図

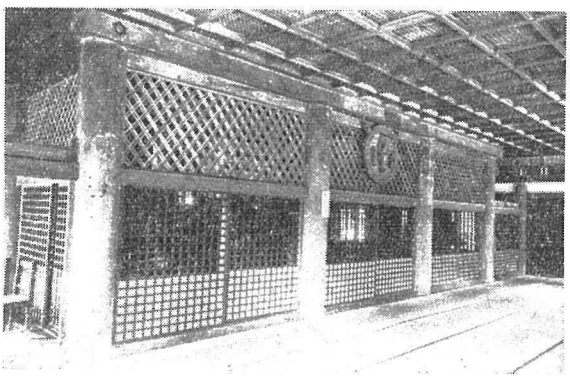


第30図　長弓寺本堂断面図

しかし時代が下ると、反対に内陣の方を広くととのったほぼ方形の空間として、礼堂をやや縮小し、一間半程のコンパクトな空間にしたもの（和歌山長保寺本堂**第31図**）仏壇を背面の庇の中へ一部おし入れて、内陣の無駄な空間を除き、全体の空間をひきしめたもの（石手寺本堂）なども現われ、また霊山寺本堂の場合のように（**第32図**。長弓寺本

堂と年代場所とも近接しながら)、礼堂をもすべて低い小組格天井張りとし、ここと内陣両側の庇との境を撤去して、同じ天井を続け、内陣の正側三面にすかし格子をめぐらして、堂内全体が内外陣の間にあだかもレースをかけたようなトランスペアレントな一つの空間を作り出したものも現れた。

第31図　長保寺本堂礼堂



第32図　霊山寺本堂礼堂

しかし鎌倉時代末には反対に禅宗仏殿の広大な空間をとり入れて、礼堂、本堂共に天井を高め、柱に貫を幾通りも通し、新装飾を巧妙に活かしたものも出現しはじめた。(岡山の本山寺本堂、兵庫の朝光寺本堂、鶴林寺本堂)こうして禅宗仏殿の方式は次第に伝統的な宗派の堂の中にも進出して行くのであった。

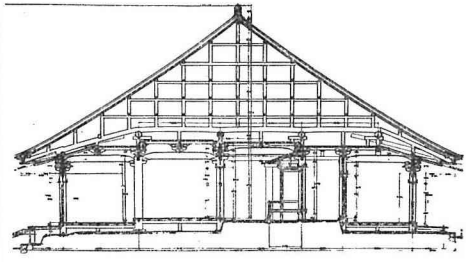
一方信仰の大衆化につれて、礼堂を広大にする要求が増大するのであるが、その早い例である大山寺本堂(愛媛)は奥行二間の礼堂を前後に二つ続ける方式をとり、奥の礼堂の床を一段と高めている(第33図)。その上この巨大な空間に応じて柱を特に太くし、蟇股の装飾を派手にして、豪華な気分を出すことに努めているが、このような傾向はやがて浄土宗などの新興宗派に引きつがれるのである。こうして中世の仏堂は遂にあらゆる空間の要求に答えて可能な方法をつくしてきたことを知るのである。

以上我が国における中世仏堂の内部空間

への要求の推移を概観してきたのであるが、その特色を一層明らかにするために、ある意味でこれと全く対照的な内容をもつヨーロッパにおける教会堂の内部空間と対比させてみよう。

ヨーロッパの教会堂のうち、主として東方で発生した有心平面のものについては先に触れたが、ここでは西方で発展して、ヨーロッパの教会堂建築の主流となった長堂式のものを採る方が適切である（**第34図**）。この種の堂は妻を正面として長い堂の反対側の奥に祭壇を設け、内部に多数の会衆を収容するものであるから、日本の仏堂が漸次礼堂の拡大へと進みながら、奥行が限定され、また最後まで祭壇を含む内陣を重視していたのと異なり、教会堂における祭壇の前の内陣が身廊部と区画されるのは特殊な場合で、大衆の座となる身廊の奥行は無限定であった。したがってその空間を規定するものはその断面であるが、日本の仏堂が堂内はむしろほの暗さを貴んだのと異なり、身廊に採光の必要から、その部分を側廊より一段と高くし、その落差を利用して、高所からふりそそぐ光をとりいれた点に全く異なった出発点があった。こうして元来身廊は人間的尺度

第34図　アミアン大聖堂身廊



第33図　太山寺本堂断面図

を超え、構造的な尺度に従って高い空間を作ったのであるが、この超越的な空間はやがに天に憧れて無限に上昇しようとの欲求にこたえ、能う限りの高さを工夫して、これに仰高的でダイナミックな表現を与えることになったのである。これは日本の仏堂が仏像や坐居する礼拝者の尺度に応じて、コンパクトなつつましやかな空間を求め、これに平明清澄な表現を与えようとしたのとは正に正反対の方向を指向したものであった。

ただ我が国の禅宗仏殿は日本においても最初から異質的なもので、やはり人間的尺度を離れた、広く高い空間を求めた点ではヨーロッパの教会堂のものに共通する点も見出し得るが、これはそのスケールにおいて全く桁の違うものであった。それは広大な気構えをつくり出してはいるが、むしろ象徴的なものであって、唯心的に眺めるなれば高大無限であっても、実際のスケールは小さいものが多く、その迫力において、ヨーロッパの教会堂とは同一段階では論じ得ないものである。しかしそれとは別に、発達したゴシック会堂のように、構造が自由度を獲得して、壁面をちじめ、残された柱や控壁のマッシブな面や窓枠を細分して作り出した繊細な調子は、禅宗仏殿の柱や斗栱などの木柄を細め、尖鋭化し、複雑化したものと通じる点を見出すのである。

結び

以上我が国の古代から中世に及ぶ仏堂の推移を概観し、これと全く無関係に発展したヨーロッパにおける同類或は対照的なものと対比することによって、その特色を明らかにすることを試みたのであるが、両者の共通する点として、古代（日本の古代とヨーロッパの古代とは実年代を著しく異にするが）のものの外観の重視とその端正さがあげられ、中世のものの内部空間への関心が挙げられた。もとより古代のものが内部への考慮を欠き、中世のものの外観が無視されたのではないが、前者は外から礼拝するのが本体であっただけにそれを整えることにあらゆる配慮を求めたように、後者は内部空間が主となる存在であって、外部はそれに従とならざるを得なかったのである。

しかしこうした共通の場において両者を比較する時、木造と石造という根本的に異質な材料を使用したことから来

る差違にとどまらず、特に仏堂と教会堂の内部空間においては、前者が人間的尺度に応じて抑制された空間にそのすぐれた特色を創り出したのと対照的に、後者は人間的尺度を離れた超越的空間をめざして、無限に高大なものを築きあげたことが対比され、そこにそれぞれの民族文化の特性を見出し得るように思われる。

本稿は昨年末、考古学教室で行った講演をまとめたものである。附記してその機会を与えられたことを感謝する。

（大阪市立大学教授）

of the work "*Pao-p'u-tzŭ*" 抱朴子, stated the theory and technique of fairy in its contents. A special shadow was casted on the work, judging from his native place of *Chiang-nan* 江南 as a descendant of the ruined people and the period before the establishment of *Tung-tsin* 東晉 when his book was drawn up.

This article treats *Pao-p'u-tzŭ-nui-wai-p'ien* 抱朴子内外篇 organically, in close relation between *Kê-hung* 葛洪 as a historical existence and the contents of *Pao-p'u-tzŭ*.

Characteristic of Architectural Space in Japanese Buddhist Temples

by

Kiyoshi Asano

The architecture of Japanese Buddhist temples was at first introduced as a thing arranging their appearance in accordance with their outer style, and then interest in their inner space grew deepened with worshippers' invasion. Soon special inner temple was created of inhabitable, compact and serene climate.

After they accepted the new Chinese style at the beginning of Middle Ages, the space suffered a great and active change under the influence of the traditional space; in comparison with the intention to the space in the indifferent European temples on each developing stage, we want to offer an aid to consider the characteristic of our national culture in Japanese architecture.

A Historical Investigation of the Party-Organization in Germany

by

Shuji Iida and Others

In the bibliographies concerning the modern and contemporary history, which were published during the last decade in West-Germany, we can often recognize the new technical terms, *Massengesellschaft*, *Massendemokratie* or *Parteienstaat*. Such a viewpoint is very remarkable